

## 第一回 山裾の閑村にて

—

むかしのはなしである。

今で言うなら中国の西のほう、山に間近いとある閑村かんそんの古びた家に、数年前から二人の人間が住んでいた。

ひとりとは三十前後の男で、名は妙漣みょうれん。こざつぱりとした風体ふうたいではあるが、どことなく浮世離れうきよなはなしている。もうひとりはまだ十にもならぬ子供で、名は雷遊子らいゆうし。この子の名前を聞いたとき、村人はそろって納得した。すなわち、かれらは仙人なのだと。

村人もはじめは胡散臭うさんくさげではあったが、この二人は村の仕事も熱心に手伝い、怪我けがや病気を治療なほし、また火事がおきたときなど、妙な術を用いてこれを消し止めたりもしたので、今ではかれらの家を訪ねる者さえあった——たまに、ではあるが。

仕事のないときには、二人は村はずれにある、高い高い崖を前にわけのわからない事などしていたが、仙人のやることなどわかるはずもないと、あえて口出しをする者もいなかった。

しかし、いついかなるときでも、子供の探求心にかなうものはない。二人のことに興味を覚え、いち早く打ち解けたのも、やはり子供たちであった。

二

今日も崖のそばでは、師弟がそろって弓を引いていた。矢もつがえずに。

「雷遊子、遊ぼうよ」

やや舌つ足らずな声と言う。大人の方が弓を引いたまま振り向くと、遊び道具を手につばい抱えた子供が、三人ばかり立っていた。

「おう、もう少ししたら終わるからな、そしたら遊んでやってくれ」

妙漣の声が響く。のんびりとした——とても、弓を思いきり引いている人の声などではない。となりで弓を引く子供が、ずいぶんと小さい弓を前に四苦八苦しているのとは対照的である。

小さな訪問者たちが去って少しした頃、妙漣が声をかけた。

「今日はそのへんでいいだろう。弓を戻せ、そおつとな」

雷遊子は、言われた通りにゆっくりと弓を元に戻し、安堵のため息をついた。呼吸を整えてから妙漣に向き直って尋ねる。

「老師、これは一体何のためなの？」

妙漣は一瞬目を丸くし、次いで眉をひそめ、しばし目をつむって考え込んだ。と、おもむろに目と口を開ける。

「たしかに、話しておいた方がいいのかもしれないな。…はつきり言って、この修行にたいした意味は

ない。小手先の術を使う者には、な」

少年は当惑げに師を見つめている。妙漣は、やれやれといった具合に軽く微笑んで続ける。

「要するにだ、お前は次の段階に入ったんだよ。もっと上の術師を目指す段階へ……」

言いつつ、目を遠くに向ける。

「上の術師……」

「実際にやったほうが早いだろう。雷、地剝法をやってみなさい」

地剝法と言うのは、彼等の使う術の一つである。術師の言つところの『光』を地に落とし、地表の一部を剥がし取るというもので、術としてはごく初歩的。もちろん、雷遊子も心得ていた。

手を組み、指を整え、目をつぶって己の中の『光』をある形に沿って動かす。何度も何度も動かすうちに、周りの『光』が自分に向かって集まってくる。自分の『光』によって変質した周りの『光』が地に落

### 3 第一回 山裾の閑村にて

ち、その表面を引き剥がす！

雷遊子の目の前で、砂が踊りはじめた。パラパラという軽く固い音がだんだん大きくなり、ついにゴロゴロといった重い音に取って変わられる。小石からやや大きな石までが飛び跳ねはじめたのだ。

大きめの石が自分の体を飛び越すまでになつてから、雷遊子は術を止め『どうだ』と言わんばかりの顔で師匠を見上げた。

妙漣は軽くうなずきながら、

「うん。まあ、それがお前の今の実力だ。初心者なら褒めてやってもいい。しかしだ、より上の術師を目指すなら、それで満足してはいかん。…見ていなさい」

師は、すぐさま型を作った。先ほどの型と比べて特に変わったところはない。強いて言うなら、こちらの方が少しばかり柔らかいだろうか。しかし、その微妙な差のもたらしたものは、劇的と言えた。

一瞬、雷遊子はその目を疑った。当然だろう。自

分と同じ型で、同じ術を使っているはずなのに…目の前では、自分の倍はあろうかと言う岩が、轟音と共に砕け散って行くではないか！！

茫然と見つめる弟子に、手をほどいた妙漣が話しかけた。

「地剥法は、決して初心者向けの術というわけじゃないぞ。使う者が使いさえすれば、立派な武器にもなる。…これから教え込むのは、そこなんだよ」

遠くから子供たちの声がしてきた。多分、先ほどの音に驚いたのだろう。妙漣は、雷遊子の子供たちへの説明役に回すと、今度は一人、崖に向けて弓を引いた。…矢をつがえずに。

### 三

術師。それは、仙道せんどうと同等、場合によつてはそれを上回るほどの力を持ちながら、歴史の表舞台はあろか、伝承にすら姿を見せない存在である。妙漣の

所属しているのは、緑宝寺空諾率りよくほくすくたついる衝派源流しゅうはいげんりゅう。数ある流派の中でも、特に表に出ることを嫌い、ただひたすらに『空魔』を倒すべく修行を続ける者達である——とでも言えば聞こえがいいが、実際はそんなに格好のよいものではない。

空魔の気に敏感すぎる者達が、唯一安心して暮らせる場所——緑宝寺——を求めて寄り集まっただけのある種の不具者の集団。それが、衝派なのである。

しかも、この空魔というものが一体なんなのか、真に知る者は一人もいない。そもそも空魔について分かっていること自体、本当に数少ないのである。その中でもっとも重要、かつ切実な問題は、「空魔の『気』が強くなると、かれらに耐え難い頭痛が生じる」ということ。このために、正体が分からなくても、無視するわけにはいかないのである。

かれらは身につけた術をもつて空魔の気から身を守りはしている。しかし、それも空魔が別の世にい

るからこそ耐えられるのであって、この世にやってきたならば、そう長く持ちこたえることは出来ないだろう。かれらが生き延びるためには、この世に出ようとする空魔を倒すか、倒せないまでも封印しなければならぬ。

前回空魔がこの世に表れたとき、戦いに加わった術師たちは全滅。しかも、充分な封印をかけることさえ出来なかった。かくして源流は、人材も、時間もないと言う、まさに存亡ぞんぼうの危機に直面することになってしまった。

生まれつき恐ろしいほどの『明』(『才能』と言い替えてもいい)を持つ雷遊子。この子は人材難の源流にとつて、かけがえのない希望の光であった。そこで、まったくもつて異例のだが、緑宝寺はこの子を緑宝寺の外で育てることにした。そのため師として選ばれたのが、とある事情で前の戦いに参加していなかった倒魔術師——鴻妙連うみやうれんなのである。

5 第一回 山裾の閑村にて

四

翌日の夜、修行を終えて家に戻ってきた師弟の許に、珍しくも来客があった。

一人は十五、六になる小柄な娘。…もっとも、これは毎日のことなので特にどうと言つこともない。「珍しい」というのはもう一人、娘と入れ違いにやつて来た男の方である。

この男、名を泉碓せんたいという。妙漣とは古い馴染みで、源流術師たちの間ではお互い『変わり者』で通っている。遠慮する仲でもないのに、妙漣は夕食の残りすすめ、客の方もそれをきれいに平らげた。その間に、妙漣は雷遊子を寝かしつけ、食器を洗い、席に戻る。

「慣れたもんだな」皿を重ねながら、客が話しかけた。「いやでも慣れるさ」妙漣は客の皿を洗い場に持って行き、帰りがけに壺と、椀を二つばかり持ってきた。

酒が入ると、舌が滑らかになる。口火を切つたの

は、泉碓の方だった。

「しかし、お前もすみに置けんなあ。さっきの娘、なかなかかわいいじゃないか」

「よせよ、くだらん勘ぐりは」妙漣は苦り顔である。

「ありゃあ、ここの村長の娘だよ。…以前に近くの崖が崩れてな、そんなとき村長が巻き込まれて大怪我けがしたんだ。それを俺が、医呪いじゆでチヨイチヨイつとやつてね。で、娘が礼がしたいつて言うから、夕飯を頼んだんだよ。俺はその日だけのつもりだったんだが、…どうも、雷遊子を気に入つたらしくて、毎日おかずを差し入れてくれるんだ」

言えば言つほど弁解口調になる。泉碓は、にやにやしながら聞いている。

「ま、医呪を習つといて助かったよ。…そういやおまえ、縁宝寺にも寄つてきたんだろ。どうだい、医呪の長の様子は？」

無理に話題を変えようとしているのが見え見えではあったが、泉碓もこれ以上突つ込むつもりはない

ようで、破顔しながら答えはじめ。

「ああ、あの薬草キチガイか、元氣だよ。周りも元氣なのが揃ってるんで、薬を使えないとかボヤいてたな」

妙漣も笑った。

「今はまだ平和なんだし、行商でもすればいいのにな」  
 「俺もそう言ったよ。そしたらあのおっさん、なんて言ったと思う？『そんな事したら、貴重な薬草が減るじゃないか』とこつだぜ」

あばら家に笑い声がこだました。

ひとしきり笑ったあと、二人の顔が急に真剣になる。

「で、仙道の方はどうだったんだ？」

妙漣の声は、いつもよりはるかに厳しい。

緑宝寺の術師達は、もともと仙道とは仲が悪い。術師が世に出るとき、その正体を知られぬように仙人の姿を借ることがあるが、これがかれらのカンにさわっているためである。

雷遊子を育てるため緑宝寺を離れている彼にとつて、これは重大な問題だった。仙道との調停役として泉碓が駆り出されたことは彼も聞いていたので、その顔を見たときから、要件は多分仙道がらみだろうと踏んでいた。

「うむ」泉碓の声は重い。手許の椀を一息で空けて、「結論から言うと、仙道の名を汚さない限り、俺達の行動は『黙認』だぞつだ。…ただし、これは非公式のものでな、公式には『無視』——術師なんぞ、この世にいないはず——だ」と

妙漣の顔がゆるんだ。深いため息は安堵からのものであろう。

「公式じゃなくてもかまやしないさ。とにかく、仙道とのゴタゴタだけは避けたかったからな」

客は椀の中の酒を眺めながら、

「仙道がそんなに恐いかねえ…お前なら、そうたいした相手でもあるまいに」

ダンッ！と強い音が響き渡る。机に叩きつけられ

7 第一回 山裾の閑村にて

た椀は、なんとかその形を保っていた。

「仙道をなめちゃいかん!!」

怒鳴ってから、はつと我にかえって寢床を見る

……が、布団は静かに上下するだけ。ふうと息をついて、抑えた声で続ける。

「たしかに俺も、相当の道士と渡り合える自信はあるさ、一対一ならな……しかしな泉碓、いかんせん数が違いすぎるんだ。いま術師は百人もいないだろうが、むこうは少なくとも五千はいる!……とても勝てる相手じゃないぞ」

乱暴に酒を酌み、一息で流し込む。

「第一、俺達の敵は空魔だろうが、他の連中と、しなくてもいいゴタゴタ起こして人死に出すなんぞ、まったくバカげてる!!」

泉碓は黙って二杯ばかり飲んだ。しばらくしてからぼつりと言つ。

「緑宝寺の連中も、そのくらい物わかりがよけりゃいいんだがな……」

弱々しい声の調子に、妙漣は不安になった。

「仙道と、なにかあつたのか?」

「ああ、あつちも自信過剰なのが多くてな……『黙認』に持つていくのだから、向こうが困つてなきや無理だつたらう。それなのに、緑宝寺のバカどももきたら……」

妙漣にも、だんだん情況がわかつてきた。

「要するに、条件付きで『黙認』か」

泉碓は、目をつむつてうなずいた。

「いま、都の方が荒れててな。ドサクサまぎれに、エセ仙人がかなり悪い事してるんだ。仙道としても見過ごすわけに行かなくなつたらしいんだが……チト面倒なのが数人いてなあ、人出が足りんだぞうだ」

泉碓は仙道に世話になつていた事があり、友人も多い。『面倒』とは何のことなのか、妙漣には薄々想像がついたが、気を使って口には出さなかった。

「それで、『手伝う代りにこつちを認める』つて詰め寄つてな、向こうは仕方なく認めた……事にしてあ

る。そうでもないよ、向こうの面子めんすが立たないんでな。ま、実のところ、しまいにや泣き付きかけてただけど……ところが緑宝寺の連中、『そこまでして認めてもらうなど、恥だ』つつつて、手伝いに出す奴の人選もしやがらん！ まったくあのバカどもは、ためえの術がこの世で一番強いとも思ってるのかね！！」

妙漣には、交渉の様子が目に見えるようだった。手伝うと言っておいて誰が行くかも伝えなければ、それこそ相手の面子が潰れる。かと言って手伝いが出来るような強い術師は、ほとんどが面子にこだわる連中である。ましてや泉碓が説得したのでは、ことを仙道に有利に計らったと勘ぐられても仕方なかつたろう。妙漣も彼らの気持ち分らない訳ではないが、どちらかと言つと『名より実を取る』たち性格であつた。

実は、泉碓が緑宝寺で説得を試みていたとき、長おき

の空諾が妙漣のこの性格を見込んで、助けを求めるよう勧めたのである。妙漣は雷遊子を育てることに關して緑宝寺の全権を得ているから、その権限を用いて独断でやったとなれば、反対派の面子も立つことになるよと読んだのだ。

もつとも、妙漣もそこまでは気がつかなかつたようである。

「わかつたよ、俺が出るつてことで納得させたんだ。で、いつ発つんだ？」

「明日の朝。でないと間に合わない」

妙漣は頭が痛くなつた。

「やれやれ、お前にも負けるよ。俺がいやだつて言つたらどうするつもりだつたんだ？」

「別に。ただ、あとで争いが起きるだけさ」平然と答える。

妙漣は頭を振りながら酒壺を引き寄せ、中身を見ると相手に押し戻した。椅子の背にかけておいた弓を取り、磨きはじめる。



9 第一回 山裾の閑村にて

「珍しいな、武器嫌いのくせに弓かい…」

そう尋ねる泉碓の顔は、明らかに不満そうだった。その視線をあつさり流して弓磨きを続ける。

「雷遊子に、貫山弓を教えようかと思つてな。まあ、俺もそうまいわけじゃないけど、『閃』を鍛えるには打つてつだけだから」

「雷遊子はどうだい、ものになりそうか？」

妙連の手が止まった。満面に笑みを浮かべて、

「うん、時間さえあればとんでもない術師になるぞ、あれは。…特に結界が凄い。『靉』の結界は一度見せたいくらいだ。変な癖がないから、きれいな結界だぞ。これで攻めの方がしつかりすれば…」

今度は泉碓の方が頭痛を感じた。こいつはいつの間にかこんな親バカになったんだろうか…友の表情に構わず喋り続ける妙連を手で制して、

「それならまあ、一人にしておいても大丈夫かな。何と言つても遠いから、子連れだと時間がかかるしな」

「ああ、そういう事か…念のため、村長に預けては

おくが…都ほどじゃないかも知れんが、ここも少し荒れててな。妙な理由をつけては税を取つてくんた。仕方ないから、となりの国へ移つちまおうかと思つてるんだがああ崖でな、身動きが取れん」

「なるほど、それで貫山弓か」

「ああ、むかし習つたのを思い出しているのさ。もう少ししたら間違ひなく出来るようになるから、それまでは何があつても我慢しなきゃならんのだが…雷遊子に納得させるのがホネでなあ…」

泉碓は寝ている雷遊子をチラリと見て、

「ん。まあ、出来るだけ早く帰れるようにはしてみよ。風乗りのうまい奴も行くことになつてゐるしな」  
言いながら酒壺を裏返しにして、最後の一滴を嘗めつくすと、

「とにかく敵さんを早めにやつつける、これが一番さ。期待してるぜ、もと総師範！」

妙連の腕が手の中で砕けた。鋭い目で相手を睨みつける。

泉碓は目線それを無視して、

「さて寝るか。あしたは早いぞあ」

伸びをしながら、寢床へと向かった。寝る場所を聞きもせず――

泉碓の布団から、寢息が聞こえてきた。

妙漣は床下から極上の酒を取り出して、しばらくの間、考え事をしながらちびちびと飲んでいた。

## 五

翌日の朝、妙漣は雷遊子を村長に預けて、泉碓と共に村を出ていった。

雷遊子は畑に出て仕事をしたり、村長の家で、娘の麗鈴れいりんの手伝いをしながら二日を過ごした。

三日目の昼ごろ、村の真中に人が落ちてきた。『風』に乗って都からやってきた術師である。見ていた村人も、不思議そうな顔こそしたものの、妙漣で免疫

が出来たのか、特に恐がりもせず、村長の許へとつれて行つた。

彼は村長や雷遊子の前でも名乗りもせず、ただ妙漣からの伝言だけを残して、すぐに消えていった。…文字通りに。

伝言はごく単純なものだった。なにせ『長引きそうだ。もう数日かかる』と、これだけなのだから。

雷遊子は少し不安になったものの、子供の本能の方がそれに勝つた。仕事も遊びも手伝いも、何でも楽しい年頃なのだ。

## 六

妙漣が村を出てから六日目の朝は、雲一つない好天だった。

元気に畑へと向かった雷遊子は、村はずれに一頭の馬がいるのに気がついた。馬をあまり見たことのない雷遊子は、興味津々しんしんで近付いてみる。するとい

11 第一回 山裾の閑村にて

きなり、上から声がした。

「おい小僧、村長はどこにいる」

大きく重い声。その先を見ると、声にふさわしい大男が、馬上でふんぞりかえっている。

（村長さんのお知り合いかな？）などと考えながら、雷遊子は馬を家までつれていくことにした。

歩きながら、馬をしげしげと眺める。また上から声がした。

「小僧、馬がそんなに珍しいか？」

「うん。こんなに近くで見るのは、はじめてだよ」

「ほお、村から外へ出たことがないのか」

「ううん、ほかの土地へいくときは歩くか、風に乗せてもらうし、それに…」後は言えなかった。上からの大声がそれを遮ったのである。

「なにい、『風に乗る』だとお…なるほど。小僧、お

前はあの仙人の弟子か！」

思わず間違いを正そうとした雷遊子は、ふと師の注意を思い出して、

「老師を知ってるの？」と、ことさら無邪気に問い返す。

馬上の男はその問いを無視し、更にドスのきいた声になった。

「おい、お前の師匠はどこにいる」

「老師は用事があつて、都に行つてるよ」

「ふむ…そうか。それは都合がいい」

妙な声の調子に、雷遊子は薄気味悪くなった。背中に感じた悪寒は、その後、村長の家につくまでずっと付きまとっていた。

七

雷遊子に呼ばれて出てきた村長父娘の顔色は、馬上の男を見るなりさつと変わった。

「なるほど、こんなあばら家に住んでいたとはな…さて、色好い返事をもらいたいものだな。聞けば、頼みの仙人もいないそうじゃないか」

馬上の男は、この地方を預る官吏<sup>かんし</sup>で、名は懷登<sup>かいとう</sup>。元は都の武官であつたが、ちよつとした失策で左遷になつてしまつた。何とか都に戻るつと探つたところが、都の大物が大変な色好みだといふことが分かつたので、地元のよい女を探し回つていた。

この村の村長は、昔は懷登が直接治めていた町の住人だつた。娘の麗鈴が懷登に見込まれてしまい、無理やりつれ去られようとしたところを妙漣に救われ、父娘共々この村に逃げて来たのである。

ついでに書くなら、村長になつたのも妙漣の術のおかげ。だからこそ突然やつてきた奇妙な旅人が、小さいながらも整つた家と、うまい酒にありつけることができたのである。

そんな事情は雷遊子には分からなかつたが、麗鈴の表情につき動かされて、いつのまにか懷登の前に立ちはだかつていた。

「小僧、どけ」

感情のない声が出る。

「どかない！」雷遊子は型を作つた。

懷登は思わず馬を数歩さげた。数年前、妙漣にひどい目に合わされたのを、体が覚えていたのである。が、気を取り直して見てみると、子供は何を仕掛けて来るでもない。にやりと笑つて、愛用の槍を取る。「どうやら、師匠の代わりはつとまらんようだな……麗鈴！おとなしく来ればよし、さもなれば、まずこの子を串刺しにするぞ！」

雷遊子は、型を少しずらした。たしかに、必殺の秘術なんか習っていない。とにかく結果を張つて、時間を稼ぐしかない。雷遊子は肩越しに叫んだ。

「ぼくのことは気にしないでいいよ！早く奥に入つて!!」

雷遊子は乱れそうになる呼吸を整えた。少しでも長く守るためには、少しでも後から術を使わなければならぬ。出来る限り術を使わないようにしなければ、老師は間に合わない！

13 第一回 山裾の閑村にて

「ほほう、守り切るつもりか……よおし、俺の槍、見事受けてみる！」

懐登の槍が、弾けるようにして子供に向かった。雷遊子は『光』を回し……その瞬間、雷遊子の目の前に何かが飛び込んだ。うろたえた少年は、結界を完成させ切れない。その隙間をついて、なにかに槍が突き刺さった！

その瞬間、雷遊子は時間が遅くなったかと思えた。目の前で、白っぽい布がゆっくりと紅に染まっていく。

「ああ……短い悲鳴が聞こえ、すぐに消えた。

「雷ちゃん……」

かすかに声が聞こえた。気のせいだったのかも知れない。そのまま、その体は目の前に崩れ落ちて行く。震えながら天に向かって雷遊子は狂ったように叫んだ

「ろおしいい……」

その背後に、まず最初の雷が落ちた。

都での仕事を終えた妙漣は、帰る途中でめまいに襲われた。泉碓らが心配そうに声をかける。妙漣は心配ないと手で合図し、風乗りの準備を急がせた。ふと、みんなから顔をそむけてぼつりと言う

「雷遊子……早まるなよ……」

八

妙漣が村についたとき、そこはすでに焼け野原であった。頭上には見たこともないほどの雷雲が詰めよせている。

（遅かったか……！）妙漣は右拳を左の手のひらに叩きつけ、齒ざしりした。

雷遊子……これは、空諾が緑宝寺で赤子を拾ったとき、その子が落ちてきた雷をもてあそんだ事からつけられた名前である。これを『雷』術の一種と見ていた妙漣は、本当に自由に使えるまで、この術を封じたつもりだったのだが……どうやら封じきるこ

は出来なかったようだ。

雷遊子は、焼け野原の真中に棒立ちになって、じつと下に倒れている娘を見つめていた。妙漣はその肩に手を置くと、沈んだ声でゆっくりと言つ。

「気がすんだか、雷」

弟子は呆けた顔を師にむけた。

「老師：倒せなかつたよ：けがだつて：できなかつたあつ：！」

浮かんできた涙に溶けるよつにして、その場に崩れる。その肩に、今度はしっかりと師の手が置かれた。

「泣きたいなら止めやしない。だがな、泣いてこの娘が還るわけでもないぞ。…起こつたことは仕方がない。しかし、やった以上は後の始末をしなきゃな。せめて、犠牲はこの娘だけにしたいものだな…」  
最後のところは、ほとんど独り言だった。

雷雲が退いて行くのを見て、村人達が集まつてく

る。妙漣は詫びの言葉を述べると、前々から考えていたことを話しはじめた。

「…こうなつた以上、奴らが軍を率いて戻つて来るのは必至でしょう。そこでこの際、となりの国に移つてはいかがでしょうか」

村長はうなずきながら、

「わしらとて、出来るものならそうしていた。隣の国は、暮らしやすいところらしいし…だが、あんたも知つておるだろうが。あの山の向こうへ、奴らに見つからんでどうやって行くと？」

「山を越えればいいでしょう」

平然と妙漣が言つ。

「バカな！あの絶壁をどう登るつて言つんだ！」

村人のひとりや噛みついてきた。妙漣はそれを目で制する。そしてそのまま、村人たちの顔をひとつ、ひとつ、確かめるかのように眺めると、大きく息をはいて言つた。

「たしかに、登るのは私でも無理です。しかし…」

15 第一回 山裾の開村にて

と、修行を繰り返した崖を指さして、

「あそこに、人が通れるほどの穴を穿てばいいでしょう」

村人がざわめいた。論争になろうとするのを、村長が抑える。

「それが出来ると言つのなら…行ってみたいですね、あの山の向こうに」

これで事は決った。

本当のところ、妙漣にも「確実に穿てる」とまでの自信はなかった。崖の向こうへ移ることを考えてからほぼ三月、毎日のように弓を引いてはいたが、貫山弓につながる『光矢』を、今だ捉えきれずにいたからである。

しかしこうなつた以上、少なくとも人の通れるだけの穴は開けなければならぬ。村人達はそれぞれ必要な荷物をまとめていたので、とりあえずその間、エセ道士との戦いで疲れた体を休ませることに

した。

九

小さい手の感触に、妙漣は目覚めた。どうやら、村人の準備がすんだようだ。師弟は弓を取り、村人達の待つ崖へと向かう。

期待と不信のまなざしの中、妙漣は、崖から五丈ほど離れて立ち止まった。弓を持ち、目をつぶると、右手の三指で弦を握って思いっきり引き絞つた。そのままの状態で、動かなくなる。

時間が刻々と過ぎて行くが、妙漣は石像のように動かない。じれてきた村人たちの耳に、微かな音が聞こえてくる。その音は、本の僅かづつではあるが、大きくなつてきたようだった。

「蹄の音だ…」震える声で、一人が言った。

その消えそうな一言で、村人たちは大恐慌に陥つた。数人が妙漣をせつこつと、そばに走り寄る。だ

が、雷遊子の方が速かった。

「邪魔したら、ぼくが相手だよ！」

男達の動きがびたつと止まった。あの雷の土砂降り思い出したのである。

雷遊子は軽く型を作りながら、師の様子をつかかった。と、妙漣の唇が微妙に動く。

「じきだ…雷遊子、結界の用意を…」

弟子は向き直つてうなずくと、崖に向けて型を作る。

村のはずれの方に、土ぼこりが見えてきた。いままで村人たちを抑えていた村長までが、せつつきはじめる。遠くに馬の姿が見えるまでになったとき、ついに妙漣が動いた。目をかっつと見開き、咽よ裂けよとばかりに叫ぶ！

「光矢一閃、世に奉らん！」

つがえていない矢を放つ！

崖に、ぼつんと小さな穴が開いた。

(まさか、失敗…?) 雷遊子の心配は、すぐに氷解

した。小さな穴の周りが、その穴に向かって勢よく崩れ落ちて行く！

雷遊子はあわてて結界を張り、崩れすぎを押えにかかった。

ある程度穴が開いたところで、村長が村人たちに、早く穴を抜けるよう指示する。その合間に、娘の遺体を体に縛り付けた。雷遊子は先頭、妙漣は最後尾で結界を張り、穴を支えながら数十人が抜けて行く。

## 十

懐登たちが村についたのは、ちょうどその時だった。人気のない家を探り、足跡を追つて穴は見つけたものの、さすがに馬は通れない。仕方なく馬を降り、鎧姿の二十人ばかりが妙漣らの後を追った。

結界を張りながら進むと言つのは、さすがにやりにくい。低い天井とあいまって、全員が穴を抜ける



17 第一回 山裾の閑村にて

までには、たつぶり二刻半(注)を要した。最後に出てきた妙漣が、結界を解こうとする弟子を制した。

「まだ張ったままにしとけ。今後のためにも、禍根を絶つ！」

そのまま村長の方に向き直り、

「先に行ってください。我らは、まだ務めを果たしておりませんから……」

村長は妙漣の目をじっと見て、深く礼をした。背中の亡骸が物悲しい。

誰もいなくなつた山裾に、鎧の音が響きはじめた。

師弟は目線を交わして、穴を見据えている。音が大きくなり、穴の淵に手が見えたのを合図にして、師弟は結界を解いた！

雷鳴をも上回る轟音と、もうもつたる煙に混じつて、くぐもつた叫び声が野にこだまする。

しばらくして、煙が晴れてきた。鎧を着た屍しかばねは、ほとんどが土に隠れていて、見ることが出来ない。だが、よく見ると一つだけ、土をあまり被つていない屍があつた。顔を確かめようと、師弟が近くに寄る。うつぶせの体を足で起こし……と、いきなりそれが跳ね起きた！

「この、ばけものがああああ……」

半分に折れた自慢の槍を、思い切り妙漣の体にしたき込む！

妙漣はそれを軽くかわした……はずだった。が、疲労は思ったより強かつたようで、避け切れずに脇腹を切られた。すぐさま繰り出した二の槍は何か当たつて折れる。雷遊子が、とつさに結界を張つたのだ。土ぼこりの顔が、見えない壁にへばりつく。

そこにはもう都への憧憬も、権力への執着も何もなかった。その目の色が意味するものはただ一つ――

『復讐』の二文字。

「雷、術を外せ！」

脇腹を押さえながら、三丈ばかりさがった。雷遊子も師の影にさがって、結界を解く。懐登はすぐさま飛び出した。もはや武器はない。ただ、妙漣に向かって凄まじい勢いで突っ込む！

「つつかい棒になってくれ！」と言いつつ妙漣は雷遊子に身体を預けて、複雑に手を動かした。右手で天を、左手で地を、支えるかのように置いて、型をきめる。弟子は斜めになりながら、その腰を肩で押さえる。

「——今一度、大気よ天地に還るべし……天・地・封・殺!!」

叫びながら、上下に置かれた手を、胸の前で叩き合わせる！

風が土を舞い上がらせ、目の前はまったく見えなくなる。雷遊子は師を支えきれず、一緒に背中から倒れ込んだ。

「老師、老師！やられるよ!!」

妙漣は、何も言わなかった。

十一

土がおさまり、目の前が見えるようになっても、懐登の攻撃はなかった。

「老師、いまの何なの？あいつは、どこなの？」

妙漣は苦しそうに半身を起こすと、ただ黙って目の前の地面を指さした。

弟子はそこをよく見て……おもわず吐きながら、目を背けた。そこには、今の今まで鎧をつけた人間だったものが、布のように薄く潰れていたのである！

「こんな……ここまでやらなきゃいけないの？」雷遊子は、もう涙声だった。

「それは敵だぞ……敵のために泣くか？」

「敵だって！敵だって……やっぱり酷いよ!!」

弟子の言葉に、妙漣の目から涙が落ちた。

「酷いか……そうだ。その心を常に持たなければ、真

の術師とは言えん。ただの人殺しだ——  
肩を貸してくれ。まだ、休むわけにはいかない……」  
弟子は師を立てせて、山を後にした。

しばらくしてから、涙をぬぐって問いかける。

「老師……老師は、ぼくを試すためだけに、あんなことしたの？」

師は、しばらく黙っていた。雷遊子はもう一度問う。今度妙漣は、わずかに微笑んで答えた。

「まだまだ修行が足りないな……」

要するに、俺も麗鈴が気に入ってたってことだ」

数日後、師弟は北へ向けて旅立っていた。

仙道との間に亀裂が生じないように、また、村長が娘のことを考えないでも済むように……

妙漣はこの後、緑宝寺に嘆願して『天地封殺』を封じた。また、雷遊子も、生涯『雷』の術を使うこととはなかった。

それでもなお、あの閑村で過ごした数年は、雷遊子にとり、もっとも楽しい思い出として、心に残ることになった。

むかしのはなしである。

注

一 五丈……当時の一丈は約3 m

二 二刻半……当時の一刻は約15分